法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-15

# コウルリッジの幻想詩の構造と解釈(2)「クリスタベル」における対立と調和

高山，信雄

(出版者 / Publisher)
法政大学教養部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編
(巻 / Volume)
45
(開始ページ / Start Page)
79
(終了ページ / End Page)
98
(発行年 / Year)
1983-01
(URL)
https://doi.org/10.15002/00005218

Hosei University Repository



# コウルリッジの幻想詩の構造と解釈(2)

## ——「クリスタベル」における対立と調和——

高山信雄

### 一、「クリスタベル」と「老水夫の歌」

「クリスタベル」は、一八一六年に公けにされたが、この詩の第一部はすでに一七九七年にストウイで書かれたと、作者コウルリッジはこの詩の序文で述べているけれど、実際には一七九八年の春とする説が有力である。いずれにしろ、「老水夫の歌」とほぼ同じ頃に作られたものと思われる。したがって、「老水夫の歌」の詩作に関わる思考や動機や方法が、そのまま「クリスタベル」の中に持ち込まれた可能性は極めて大きい。

「老水夫の歌」が対立の詩であるといえるならば、「クリスタベル」もまた対立の詩であるといえる。超自然現象をテーマとした点でも、両者は共通している。夢魔(ナイトメア)と関連する幻想性を捉えてみても、両者とも共通する。また、倫理性を主題としているという見方も、これまでこの両者に適用されてきた。さらに、詩人の心の中の葛藤を描いた詩であるという立場をとっても、まさに両者には共通点がある。

こうした両者の類似性は、それがいわゆる「驚異の年(アンニュス・ミラビリス)」における作品であるという共通した背景からも考えることができる。詩人としてのコウルリッジが、もっとも深遠で幻想的な詩的体験を理解し得た年が、この「驚異の年」であり、ドイツへ渡る前の一年間であった。

Hosei University Repository



「クリスタベル」の第二部は、ドイツから帰国後の一八〇〇年にケジックで書かれたというが、第一部が書かれた時代と第二部が書かれた時代では、コウルリッジの詩作精神に大きな変化が見られるといわれ、通常、第二部が第一部と較べて精彩を欠くとされているのは、まさにこうした作品の精神の変化と詩的体験についての感受性に問題があるように思われる。

「老水夫の歌」における階層構造の考え方は、ほぼそのまま「クリスタベル」にもあてはまる。芸術のレベルでの「クリスタベル」には、韻律の上でコウルリッジ自身が新しい試みと考える実験がなされている。すなわち、この詩の序文に述べられているように、音節の数によらず強勢の数でリズムを保っている。これは英詩の歴史の上で、必ずしも新しい試みとは言い得ないかも知れないけれど、作者自身はまったく新しい方法で詩作したと考えている。これについてはすでに述べたので、[1] ここでは深入りせず、次に第二のレベルの問題について簡単に触れたい。

いわゆる物語のレベルとしては、この詩は強烈な倫理観を生じさせるような、反道徳性に満ちている。クリスタベル姫とジェラルダインとの不純な行為が、何といってもこの詩の背景となっているキリスト教的倫理観によって鋭く浮き彫りにされる。道徳性といい、鳩や蛇で代表される象徴性といい、寓話レベルの条件を満足している。

第三の哲学のレベルについては、「老水夫の歌」ほどの深みはないが、しかしながら、クリスタベルとジェラルダインの思考や行動の様式を人間精神の分極化された二つの極と考えると、これは個としての人間精神の内面の葛藤を表わすことになる。

「老水夫の歌」と「クリスタベル」はこのようなさまざまの類似性を有しているが、その類似性の基本となっているのは、詩の構造に関わる対立概念の様式である。すなわち、極の理論がこの二つの詩の共通する基盤となっているのである。それゆえ、「クリスタベル」を解釈する上での三つの尺度、つまり、芸術的・道徳的・哲学的な価値を、極の理論から考えてみると、この詩は比較的すっきりとした解釈ができる。

芸術的価値については、音楽性を基礎とする。個々の情景に応じた言葉を適当に選ぶことが、音楽性につながる

Hosei University Repository



ものとなる。これには音節の数も、強勢の数も、詩のリズムを整えるために重要な役割りを果しているが、微妙な明暗をつけるのは母音および子音の種類とその組み合わせによる。この音素間の配列による効果は、すでに「クーブラ・カーン」の場合について述べたので、ここでは省略する。[2] また、ほかに、音楽性における対立形式の重要な応用機構としては対位法の導入があるが、本論での重要な問題は、幻想詩の意味構造における対立関係を探ることであるから、これらのことには深入りしないことにする。

寓話のレベルでの対立は、この詩が未完成の詩であるところから、不明な部分が多い。しかしながら、この詩は本質的には人間精神の葛藤と苦悩を直接のモチーフとしているように思われるので、寓話の面でそれが表わされるものは、キリスト教的倫理観に結びつけられる。すなわち、「愛」がこの詩の主題であると思われる。つまり善性と魔性の存在を対照的に描出する上でこれが必要なものとなっている。そして、魔性が神の愛の前に消滅するときに、世に秩序が存すると考えられている。

## 二、クリスタベルとジェラルダイン

主人公クリスタベル姫は、純真で無垢な乙女であって、遠くへ行った恋人を想い、その身の安全を願って、深夜に森に入ってお祈りをする。恐れを知らない可憐なこの乙女を堕落させようと計るジェラルダインは、恐ろしい魔女であると考えられている。ジェラルダインはこの世の悪を知り尽していて、何も知らないお人好しの姫を、魔性の餌食にしようとする。ジェラルダインはあでやかな女性の姿で現われるが、その心はまさに魔性の女のそれであり、はた目には美しく見えても、恐怖を感じさせる。この両者は、同じ女性の姿はしていても、その心は両極端である。

そもそも Christabel という名は、Christ と Abel とから合成されたものであるという説がある。キリストは神の子で、神の慈愛に生きる者であり、アベルはアダムとイヴの第二子であるが、悪い兄カインに殺されてしまう。いわば、アベルはカインの悪の犠牲にされてしまうのである。カインをジェラルダインに置き換えてみると、何か

Hosei University Repository



この物語の前途を暗示するようにも思われる。また、Christabel を Christus と bellus との合成語だとする考えもある。つまり「愛らしい洗礼者」の意味となる。いずれにしろ、可憐優美な乙女を連想させるに充分である。

一方の Geraldine は、Gerald の女性形である。Gerard はゲルマン語で、英語でいう spear + rule の意味を持つから、ジェラルダインという名は、如何にも戦闘的な女性を意味しているとする見方もある。

このように、クリスタベルとジェラルダインとは、女性の姿をした二つの極端な精神のタイプ、すなわち、純情な乙女と恐ろしい魔女を表わすのにふさわしい名である。

この女性の二つの様態は、精神の二つの極である。クリスタベルは純真で無垢である。一般に、幼児は無心で純粋であるが故に、可愛らしく思われる。いわば、神に近い状態である。成長して物事を知るに及んで、不純の度を増し、年老いた魔女はまさに不純で狡猾であるように思われる。このように、ジェラルダインは魔女で悪の力を表わすという見方は、ギルマン (James Gillman) 以来、いわば通説となっている。

こうした見方は、「クリスタベル」を宗教的色彩の強い道徳的物語と見る限り、ある程度妥当する。というのは、この物語ではジェラルダインの役割が単に真・善・美および純潔というようなものに対する悪徳の攻撃と見なされる部分が、非常に強調されているからである。

クリスタベルとジェラルダインが善玉と悪玉という稚拙な西部劇的区別に、読者は満足できるであろうか。「クリスタベル」という詩が、こうした単純な思想のみを背景にしていると考えれば、この詩は興味本位の物語詩に堕落することにもなりかねない。しかし、この詩が単純な宗教詩ではないことに、多くの批評家の意見が一致している。ただ、その深みの程度が問題となるのである。深遠なキリスト教倫理観を説いたものであっても、その主題がキリスト教以上に及ばなければ、やはり非キリスト教国の読者にとっては、宗教的説話詩の感を深くする。

「クリスタベル」の特徴は、宗教的倫理観にあるのではない。表面はそう見えても、その深層構造には、もっと哲学的な意味が含まれている。この詩は幻想性あるいは超自然性がその特色であることは明らかである。それゆえ、この詩におけるクリスタベル姫は、幻想的世界に送り込まれた人間界の代表者である。素朴であり従順であっ

Hosei University Repository



て、ある意味では子供のような無垢な心を持った人物であり、それが育ちの良い姫として表現されているのである。それに対してジェラルダインは、人間界と対立する異質な世界の代表者である。その世界は超自然的世界であり、人間の手の届かない別種の世界である。この超自然の世界とは、いわば自然界の法則が無視される世界であって、そこに住む者には時間に拘束されない自由があり、刹那的時間を生きる人間とは大きな違いがある。すなわち、超自然界は人間界の法則の成立しない四次元の世界である。こうした二つの世界の対立が「クリスタベル」の重要な根拠となっている。このことは万人の認めるところである。したがって、この両者の対立と調和が、この詩の大きなテーマであることも、一般に肯定され得るであろう。

## 三、超自然的存在と人間

では、ジェラルダインは超自然界のどんなところへ位置づけられるであろうか。超自然界には、天上界があり地界があり、その他さまざまな世界がある。ジェラルダインがクリスタベルを襲うことは、クリスタベルの美しさ、心の優しさ、純潔の誇りなどに対する、魔女の嫉妬であろうか。もしそうであるとするならば、ジェラルダインはクリスタベルの苦悩を見て喜ぶはずであり、そのためには、さらに積極的にクリスタベルを悩まし続けるはずであろう。

このように考えてくると、一義的にギルマン流の解釈を下してよいものかどうか疑問になる。実際に、近年こうした解釈に反論を唱える者も現われている。ネザコット (Arthur H. Nethercot) はその著作『トライヤーメインへの道』(*The Road to Tryermain*) の中で、ジェラルダインは魔女ではなくて精霊であって、与えられた任務を果しているだけなのだ、と述べている。

クリスタベルの悩みは、「遠くへ行った恋人」を待つことにすりかえられて表現されていたはずである。一方、ジェラルダインは魔女でも悪鬼でもないし、どんな種類の邪悪な存在者でもなく、非常な善意をもつけれど、自

Hosei University Repository



分に与えられた任務を実行している精霊なのである。彼女はこう語る。

天上に住む者たちすべては
あなたを愛している、聖なるクリスタベルよ、……

さらに、クリスタベルの母親の亡霊に対して、ジェラルダインは自分の使命を果す間には特別の力が与えられていることを気づかせようとすることを思い出そう。もう一つ付け加えると、ジェラルダインの過去を「保護観察的」基盤の上に説明することが可能である。(3)

ジェラルダインは過去に何か罪を犯して、その報いで横腹に見るも無残な烙印を押されたのであり、ジェラルダインの将来は、彼女に課せられた任務の遂行にかかっている、とネザコットは考える。

いずれにしろ、ジェラルダインを心身ともに汚れきった邪悪な魔女だと断じるのは、やや早計の感がある。ジェラルダインの行為には、何となくうしろ目たさが見受けられる。クリスタベルが床に伏したのを見守って衣服を脱ぎ、その醜い横腹をクリスタベルに見せた。しかし、そのために身動きできなくなった姫に対して、ジェラルダインの行動には、ややためらいが感じられる。

しかしジェラルダインは、口もきかず身動きもしない。
ああ！　何とおびえた表情だったろうか？
彼女は心の底からやっとの思いで、
何か重い物を、半ば持ち上げるかのように
姫を見つめ、やや時間をおいて、
それから突然、己れの立場を示すかのように

Hosei University Repository



侮りと誇りのうちに　気を取り直して
姫の傍らに　横になった！――
そして両手で　姫を抱いた。
ああ、何と悲惨なことよ！
低い声で、悲しげな顔をして
ジェラルダインはこう言った。
「この胸に触れた者には　魔力が働き、
おまえの言葉を支配するのだ、クリスタベルよ！
おまえは今宵知り、明日も知ろう、
私の恥のこの印、悲しみのこの印を。」(4)

〔二五五行―二七〇行〕

もしもジェラルダインが自分の意志でクリスタベルに屈辱を与えるためにやってきたのであれば、この場においては苦悩を表わすどころか歓喜を示すことであろう。ところが、ジェラルダインにはそういう様子はない。如何にも仕方なく行動するかのような印象を与える。こう考えてくると、ネザコットのいうように、ジェラルダインは精霊であるように思えてくる。したがって、ジェラルダインとクリスタベルの対立は、善玉・悪玉的な対立ではなく、むしろ人間的なものと超自然的なものの対立であると考えられる。

クリスタベルは純情可憐な乙女なので、ジェラルダインから受けた行為は屈辱に耐えない。しかし一方のジェラルダインには、征服した者の喜びのようなものは感じられず、もっと上位の者の命令通りに行動していると思われる節がある。もし、ジェラルダインにこうした行為を命じた者がいるとすれば、それはキリスト教的倫理観からいうと、いわば邪悪な者とみなされるに相違ない。ところが、ジェラルダインが精霊であり、神の命令で行動すると

Hosei University Repository



考えれば、それを命じた神なるものも邪悪な者となり、キリスト教的価値体系からすると、大きな矛盾がある。そこでキリスト教的な立場からは、ジェラルダインを邪悪な魔女としたがるのも無理からぬところである。しかし、コウルリッジもそう考えていたのかどうかは疑問である。彼がこの詩を書いた頃は、どちらかというと汎神論的傾向が強かったことを思い併せると、この逆ではないかと思われる。

「クリスタベル」を通読する限りでは、表面にキリスト教的道徳思想があふれている。イエスとかマリアとか聖者とかいうような言葉がたびたび出てくるし、祈ることも頻繁に行なわれ、まったく敬虔なキリスト教徒のクリスタベルが登場する。いったいこの詩の究極的な目的はどこにあるのであろうか。それとも、結末が不明なものに目的を求めるのは、所詮無理というものであろうか。音楽的に美しく、格調の高い詩のうちに、斯くも卑猥な主題が昇華されていくという芸術的手腕には、まったく驚嘆する。読者は芸術的な格調の高さのうちに、これと対応する倫理観を、無意識のうちに期待しているのであろう。したがって、この詩は「倫理的である筈だ」という命題を自らのうちに引出してしまう。

クリスタベルの危難を、聖母も聖者も救えずにいる。この事自体、神の恩恵を感じさせないように思われる。第三部以降の展開が、ギルマンの語るようにハッピー・エンドであれば、この考えが実証されるが、現存している部分からは、そう簡単な結論は得られない。ちなみに、ギルマンが語るところによれば、第三部と第四部においては、およそ次のような物語になる筈であったという。すなわち、レオライン卿から遣わされた吟遊詩人ブレイシーが、弟子の若者と二人で山道を越えてトライヤーメインの地へやってくる。だが、この国にはよくあった洪水の一つで、城は流されて、城の跡だけしか見つからなかった。詩人は帰ることにした。ジェラルダインは忽然と消えてしまった。しかし、この詩人の帰りを待って再び現われ、巧みな手くだで男爵を怒らせ、嫉妬をかりたてた。年老いた詩人と若者がやってくると、ジェラルダインはもはやローランド卿の娘ではいられなくなり、クリスタベルの愛人に姿を変えた。クリスタルベルは理由もわからずに、このかつての最愛の恋人に対して嫌気がさしてきた。男爵は彼女のこの冷たさに我慢できなかった。彼女は父親の懇請で気の進まないこの相手と結婚することになり、祭

Hosei University Repository



壇へと歩んでいったとき、本当の愛人が帰ってきた。そして彼女が愛のしるしとして手渡していた指輪を示した。こうして魔女ジェラルダインは愛の力に打ち負かされて消然と消え去った。そして城の鐘が鳴り渡り、母親の声が聞こえた。斯くして、この二人の盛大な結婚式が行なわれた。その後、父と娘は仲よく暮した。これがギルマンの語る荒筋である。(5)

もし続編がこのように運べば、この詩はキリスト教的倫理観をテーマとした愛の偉大さを示す物語詩とも考えられるが、これについては確証がない。むしろコウルリッジがこの詩の続きを書けなくなった理由は、彼の心の変化にあったのではないだろうか。すなわち、コウルリッジが「クリスタベル」を書いていた時期は、ユニタリアンからトリニタリアンへの過渡期であり、ドイツ観念論哲学に触れる前後であって、プラトン、プロティノス、ブルーノ、ベーメ、スピノザなどの著作を読み耽っていた時代でもあった。そこでコウルリッジの心には、ギリシャ的多神教の思想と近代汎神論の思想とが大きな比重を占めており、精神世界の構成についても、非常に自由な思考をめぐらしていた時代であった。こうした思想的知識を背景としていたのであるから、精神上のキリスト教的な束縛はそれほど大きなものではなく、後に神にまで高まった絶対自我を認める思想の根拠となった自由があったのである。

## 四、神と悪魔と夢

このように、自由な思考を可能とする時期を背景として、この詩が書かれたことに注目しなければならない。コウルリッジは『文学評伝』その他の論文で、ナトゥーラ・ナトゥーランス（自然の本質）について述べ、人間と自然の、調和と融合のうちに芸術が誕生することを主張しているが、そうした創造的で生産的な自然とは別個に、これに対立するものとしての、破壊的で退廃的な自然をも「クリスタベル」に描き出している。世界を支配するのはキリスト教的な全智全能で真にして善なる神ではなく、コウルリッジが一八三〇年四月三〇日の「食卓談話」で言っているように、世界を支配しているのは悪魔なのかも知れない。(6) 人はこの悪魔の力には打ち克つことはできない

Hosei University Repository



ので、神を信じ、神を拠り所とする。そう考えなければ、精霊としてのジェラルダインの説明がつかない。なぜならば、真にして善なる神ならば、処女の跨りを汚すようなことを命じるとは思えないからである。こうした視点から「クリスタベル」を見直すと、超自然的幻想の世界でのジェラルダインとクリスタベルの物語は、一層明確な意味をもつことになる。

こうした背景は「老水夫の歌」にも共通する。何とならば、ほぼ同じ時期には同じ思想背景があったと考えられるからである。

よく愛する者は　よく祈る者だ、
人も　小鳥も　獣(けだもの)も。

〔「老水夫の歌」一七九八年版　六一二行―六一三行〕

という有名な詩行には、絶対者への信仰があるが、それは必ずしも自己の外の神にではない。もしも老水夫が苦行の果てに神にまで高まる精神をもつに至ったとすれば、それは悪魔に対する対立であり、挑戦でもある。実際に、老水夫の運命は神によって定められたのではなく、「死」と「死中の生」との賭で決ったと見るべきである。そう考えるとき、老水夫は神よりも悪魔的な存在者によって操られたことになる。

そしてキリストは　怒りのあまり
私の魂を　憐れんではくれまい。

〔同　二二六行―二二七行〕

と老水夫が語るのは、コウルリッジの真実の叫びであろう。また、

Hosei University Repository



天を仰いで　祈ろうとしたが、
祈りの言葉が　口から出る前に、
悪魔のささやきが　やってきて、
私の心を　塵のように乾かした。

〔同　二四四行―二四七行〕

というのは、まさにこの場の状況の、充分な説明となろう。

一方、「クリスタベル」において、ジェラルダインの力は姫の守護霊である母親の亡霊にまでも及ぶ。これはH・ハウスのように、さらに偉大な者から委託された力であるとも考えられるし、ジェラルダインが使命の完遂上の、本来持っている力の実力行使とも考えられる。

立去れ、さまよえる母よ！　やつれてしまえ！
私には　去れと命じる力があるのだ。

〔二〇五行―二〇六行〕

ここでジェラルダインに与えられた力は、霊をも支配するほど強大なものである。これが魔性の力であるとするならば、それを与えたものはサタンであろう。『失楽園』におけるサタンは神に属したが、この世には絶えず神とサタンの戦いが繰り返されているようである。サタンのような反逆心と力強さをもつ暗黒の存在者が、神の手の届かないところで、あるいは神を打ち負かして、この世を動かしているとすれば、神への救いの祈りは徒労に終ることになる。

Hosei University Repository



孤児の呪いは　天国の霊を
地獄へと　引きずり込む。

〔「老水夫の歌」二五七行―二五八行〕

というようなことがあり得るとすれば、天国で神と共に暮す霊とて安心はできまい。

コウルリッジの内的世界の葛藤は、ミルトン的世界の再現であり、神とサタンの闘争の場である。したがって意識的な世界には安住の地はなく、放浪者のようにさまざまな思想から思想へと彷徨する。それゆえ、コウルリッジの心安まる憩いの世界といえば、夢の世界しかないことになる。夢の世界でも悪魔が横行し、ナイトメアたる奇怪な女性も頻繁に現われ、コウルリッジの魂を悩ます。しかし、それ以上の楽しい世界も、ときとしては出現する。それはあらゆる肉体的・精神的苦痛から解放された、あの「クーブラ・カーン」のような世界である。

クリスタベル姫も、夢で恋人との逢う瀬を楽しんだ。

姫は昨夜　ずっと夢を見続けた。
最愛の　あの騎士の夢を。
姫は真夜中に　森の中で祈った、
遠くへ行った　恋人に幸あれと。

〔二七行―三〇行〕

ここでは、コウルリッジの夢とクリスタベルの夢とが二重写しになっている。コウルリッジが夢に託す希望や歓びは、ここではクリスタベルの歓びとなっている。

Hosei University Repository



僕が目を閉じると　さまざまな絵があらわれる。
大きくて立派な　泉があり、
柳の木と　崩れかけた小屋があり、
そこに君が、僕とメアリーがいる。(7)

この「白昼夢」('A Day-dream') と題された詩の一節には、恋人を想うクリスタベルと同じ気持がこめられている。コウルリッジは夢を見たくて眠るのであろうが、それが昂じて白昼夢を見ることがしばしばあったという。現実の生活に対する適応性を著しく欠いたこの詩人にとって、夢は恰好の逃避の場を与えたのかもしれない。いや、それどころか、積極的な創作の場すら与えているように思われる。

## 五、感情と理性

「クリスタベル」に見られる対立のうち、たいへん重要なものの一つに、感性と理性の対立がある。クリスタベルは貞節で純情な乙女であり、恋人に愛を誓い、恋人を想って深夜の森で祈りを捧げる。また、父想いであり、敬虔なキリスト教徒である。それゆえ、彼女の心に占める理性的なものの割合は大きいように思われる。それに対して、ジェラルダインは、いわば感性的であり、むしろ官能的な美しさをもつ女性として登場する。そしてクリスタベルに官能的歓びを与えることが、あたかも彼女の任務であるかのような印象をもたらす。この二人の女性は、コウルリッジの分身であるようにさえ思われる。コウルリッジはクリスタベルのように純真で世間知らずのところがあり、そのためにパンティソクラシーの計画にのめり込み、結婚にも失敗する。また、人生の落伍者のような一面があり、計画性に乏しく、大学は中退するし、口ばかりで行動が伴わなかったりする。そして、夜と月と酒と恋を謳歌するディオニソス的な面もある。通常、感情に対して理性は優勢であるが、それは覚醒のときのことである。夢の中では理性は働くが悟性能力は極度に低下し、物の区別が曖昧になって、すべてが漠然としてくるけれど、感

Hosei University Repository



情はますます鋭さを増し、ふとした感覚の変化が大きな感情の変化となることがある。この状態では、知性は感性に先を越されている。

理性の作用は祈りへとつながっていく。「よく祈る人は、よく愛する人」である状態は、こうした理性下のことである。真昼の太陽を受けて教会に集う人にこそ、こういう言葉が通用する。

一方、感情は理性がなくとも機能する。クリスタベルは官能的な歓びに浸ることにより、これまで知らなかった世界を知るようにもなる。しかし、キリスト教的倫理観からすれば、これは罪悪である。それゆえ、クリスタベルは心ならずも罪を犯したことになる。だが、こうした官能的歓びを、コウルリッジは避けているとは思えない。むしろ彼自身はディオニソス的な、感性のほしいままの放縦な生き方をしてみたかったのではあるまいか。彼はそれをジェラルダインにやらせている。クリスタベルを誘惑し、感性界に引きずり込むことで、苦悩を歓びに変えようとしたのである。これはアダムが与えたイヴの歓びでもある。クリスタベルは『失楽園』の、サタンに誘われるままに神にそむいて楽園を追われるエヴに似ているが、このあたりは魂と肉体との調和を掲げるギリシア的思想の影響も見逃せない。

クリスタベルの味わった感情には、複雑なものがある。

見よ！　クリスタベル姫は、
あの夢心地から　目が覚めた。
手足のこわばりは解け、その顔色は
悲しげに和らいで、滑らかな薄い瞼は
眼の上に閉じて　涙を流した――
大粒の涙に　睫毛が光っていた！
そしてときおり、微笑むように見えるが、

Hosei University Repository



それは突然光を受けて微笑む　幼児のようだ！

〔三一一行―三一八行〕

ここでクリスタベルの流す涙は、悔恨の涙である。これは宗教的道徳観に恥じる理性が流させる涙でもある。クリスタベル姫の微笑みは官能の歓びに由来する。日本的な諦めの微笑とはどうしても思えない。それは、感覚が捉えた歓びの感情の表われである。クリスタベルの心は、この両極の間に揺れ動く。それはちょうど、コウルリッジが経験した世界でもある。

レオライン卿の心の動きも、理性と感情の板挟みになる。ジェラルダインがトライヤーメインのローランド卿の娘と聞いたときに、彼の胸は激しく高鳴る。ローランド卿とは、ざん言がもとで別れた旧友だったからである。レオライン卿は、娘の葛藤が理解できず、

母の霊にかけて　お願いします。
どうかこの女を　追い出してください！

〔六一六行―六一七行〕

と娘が言うのに、耳を貸さない。彼は娘が嫉妬していると思っているので、旧友を重んじ、友情を考えるあまり、我が子への情を抑制するのである。ここに彼の理性と感情の相剋が見られる。

ここでは理性が友情、感情が我が子への愛を担っている。レオライン卿は、友情と愛との二者択一に悩む。しかし、旧友の娘を前にしては、男爵の威厳と自尊心が愛を取ることを許さず、友情を優先させてしまう。これは一見、理性的であるかのように思えるが、真実を知る者の判断ではない。そこに感情の優越を暗示している。父子の愛情は父子の絆であり、恋愛感情は恋人に対する愛の源泉である。愛とは宗教を越えたところに存在するものであ

Hosei University Repository



る。何人も宗教的倫理規範に示されずとも、親を愛し子を愛し、心の交う恋人を愛する。したがって、愛はキリスト教の占有物ではなく、普遍的なものである。この「クリスタベル」の主要なテーマは愛であることは容易に理解し得るところである。愛は感情と密接に関わり合う。愛のあるところに、愛しく思う感情があり、この逆も成り立つ。しかし、愛のあるところに必ずしも理性は存在するとは限らない。コウルリッジが描くクリスタベルを取り巻く幻想の世界は、まさに愛の交錯する世界であり、したがって感情の振幅の大きな世界でもある。

コウルリッジが描こうとしている世界は、日常性とは無縁の超自然的幻想に包まれた世界であるが、そこに生起する愛と葛藤は、日常の世界に比べて決して弱いとは思えない。むしろ日常性が遠のいているだけに、理性が後退し、感情が強くなっているので、愛も葛藤も一層強力なものになっている。

## 六、夢と現実の倒錯

「クリスタベル」に見られる昼と夜の対立と倒錯は、また現実と夢の倒錯でもある。クリスタベルは遠くへ行った恋人のために、真夜中に森の中で祈る。朝や昼間や夕方ではなく、真夜中にである。満月の夜に祈れば想いが叶うと信じられているからであろうか。いずれにしろ、夜であることと、月が出ていることが、「クリスタベル」の重要な背景となっている。月といっても、この宵は特に満月であり、月の光がもっとも強いときである。この詩では、月夜に起る諸々の出来事は、昼の太陽の下で起こる出来事よりも、ずっと重要なものとなっている。

第一部は、すべて夜の出来事であり、月光とランプに照らされているときのことであるが、第二部は翌朝の出来事であって、第一部と対比をなしている。月光は「老水夫の歌」において非常に重要な役割を演じていることは、これまでも度々論じられているが、「クリスタベル」の第一部でも、月光が大きな意味をもつ。ここでは月光が昼の太陽以上の作用をしている。情景を太陽ほど鮮明に映し出しはしないが、その冷やかで物憂げな光を浴びて、ジェラルダインは白く光り、あでやかに映る。魔女にしろ精霊にしろ、真昼の眩燿よりも月の微光を好む。魔女も精霊も真昼には充分活動できないのである。諸々の物語の中の亡霊も、夜明けと共に冥界へ戻る。「ワルプルギス」に

Hosei University Repository



妖怪が集うのも、夜に限られる。また、妖精たちも月光の下で輪になって踊る。したがって、超自然的な存在者が活躍するためには、月光が重要な意味をもってくる。

しかしながら、夜は、そして月光は、精霊や妖怪たちだけに恩恵を与えるものではない。「クリスタベル」では、むしろクリスタベル姫自身が夜を好んでいるようにも思える。だが、昼と夜の間には、また別の世界がある。それは夢の世界である。「クリスタベル」の第二部の背景となっている昼の世界は、クリスタベルにとっては、好意的で真実を語る世界ではない、夢と幻想の世界にこそ真実がある。

クリスタベルが　それを眺めていたとき、
心に一つの　幻想が生じてきた。
恐怖の幻と　あの感触と苦痛だ！
思わず身を縮めておののき、再びそれを見た——

〔四五一行—四五四行〕

クリスタベル姫がここで見ている幻は、単なる妄想ではなくて事実である。ここでは現実が偽りであって、幻想が真実となっている。すなわち、幻想と現実との倒錯がここに見られる。

両目を開いて（ああ悲しいかな！）
眠っていて、夢を見つつおびえている。
また、おびえつつ夢を見ている。しかも私にはわかるのだが、
あの夢だけを見続けているのだ。それは——

〔二九二行—二九五行〕

Hosei University Repository



ここでクリスタベルの見ている夢は事実であって、現実こそジェラルダインによって創り出されている虚構である。つまり、ここでは夢が真実であり、現実が虚構なのである。それゆえ、クリスタベルにとっては、夢も幻も同じように真実を示すものとなっている。

現実と幻想の倒錯は、クリスタベルだけのものではない。吟遊詩人のブレイシーも夢の中に真実を見る。

だが、可愛いい姫のために　身をかがめて
その鳩を　手に取ろうとすると、
何と見たものは！　一匹の緑色の蛇が
鳩の翼と首に　巻きついていました。

〔五四七行―五五〇行〕

詩人ブレイシーには魔力に対して効験あらたかな音楽と聖なる詩があるので、魔女も手出しができない。この詩人は、このように詩の力によって真実を夢に見ることができる。

「クリスタベル」においては、このような昼と夜の価値観が、現実と幻想とに関連してまったく通常の世界とは逆転している。クリスタベルの当面する現実には、真実が少なく、虚偽が横行する。それにひきかえ、夢や幻想には、真実がある。真も善も美も、夢と幻想のうちに形をとって現われる。こうした現実と幻想の倒錯は、コウルリッジその人の倒錯であり、それが形を変えて作品に表わされているように思われる。また、夢と幻想の混在も、コウルリッジに個有の現象であり、彼が白昼夢に憧れたという事実が、それを裏書きしている。

Hosei University Repository



## 七、むすび

これまで調べてきたように、この詩は諸々の対立要素によって構成されている。超自然的存在者と人間の対立は、「時」の相における対立でもある。一方は永遠の相で活動するが、他方は時の流れの刹那においてしか活動できない。理性と感情は、精神機能の両極である。また、幻想あるいは夢と現実との対立と倒錯は、真なるものの認識形態の両極である。さらに、クリスタベルの心に生じた罪と悔恨の意識と、官能の欲びとは、倫理観の両極にある。

超自然界と人間界とは、確かに次元の違う世界であるけれど、人間は超自然的存在者を考えることで宗教を考え出し、普遍的な倫理・道徳を作り出してきた。超自然界は昔に遡るほど精彩を放つので、この詩は中世の一男爵の館を舞台としている。そして、超自然的存在者の出現と人間との交流は、この世の中を奥深いものとしている。人間抜きの超自然界は無意味であるし、人間のみでも無味乾燥の世界になりかねない。両者があって、はじめて宗教が生れる。したがって現世とはこの両者の混在する世界であり、いわば極理論的な両者の相互透過の場でもある。

理性と感情は、それぞれ単独で機能することは稀である。一般の人間にとって、理性と感情は荷車の両輪のようなもので、ほどよいバランスが必要となる。理性の眼鏡で物事を見ると大切なものを見落すことがあるし、感情のみで物事を判断するのはなお危険である。誤り易い理性と真実を観る感情とは、まさに実世界における両者の役割の倒錯である。この詩における理性的判断には直観が欠けるので、それは表面的には理性的であっても、実はコウルリッジが考える真の理性ではないのかもしれない。いずれにしろ、理性的なものと感情的なものの調和のうちにこの詩がある。

ジェラルダインの美しさは現実的であるが、幻想の夢のうちに醜い蛇の姿に変わる。それゆえ、幻想夢のうちに真・善・美が存在することになる。一般には現実は確実なもので、夢は不安定なものというのが常識であるが、コウルリッジの描き出す世界では、往々にして夢のうちに事物の本質を見出すことがある。すなわち、自然の本質（ナートゥーラ・ナートゥーランス）

Hosei University Repository



は、幻想夢のうちに存することもあるのである。

このような種々の意味において、「クリスタベル」という詩は、コウルリッジの幻想的な詩的体験の世界を描出したものであることがわかる。それは現実的な表裏をひっくり返したような、この詩人の個有の世界である。それは種々の対立と調和の世界である。まさにこの詩は、コウルリッジの極理論の体系を実践的に披歴した文学作品であるといえる。

註

(1) 拙稿「コウルリッジにおけるシラーの影響(1)」『法政大学教養部紀要』第三六巻、四三—四五頁、一九八〇年、

(2) 拙稿「*Kubla Khan* の音楽」, *Academia Literaria*, 第一巻、二二—四〇頁、一九七八年。

(3) Arther H. Nethercot, *The Road to Tryermain* (Westport, Connecticut : Greenwood Press, rep. 1978), p. 206.

(4) *The Complete Poetical Works of Samuel Taylor Coleridge*, ed. E. H. Coleridge (Oxford : Oxford U. P., 1912), I, 224—225. 以下の詩の引用はすべてこのテキストによる。

(5) Humphry House, *Coleridge—The Clark Lectures 1951-52*—(London : Pupert Hart-Davis, 1969), PP. 127—128.

(6) *Table Talk and Omniana* (Oxford, Oxford U. P., 1917), p. 81.

(7) *Poetical Works*, I, 385.